

公益財団法人

動物臨床医学研究所学生セミナー

一流の臨床獣医師をめざせ「臨床ってこんなに面白い」

農林水産大臣指定臨床研修診療施設(動臨研グループ)の各病院長が小動物臨床獣医師を目指している学生の皆様に向けて臨床に則した教育セミナーを行います。臨床獣医師による循環器病学、血液病学、皮膚病学、内分泌学、神経病学、外科学のセミナーで、各分野で知っておかなければならない基本的なことを中心とした内容となっております。各病院の施設紹介なども行う予定です。将来臨床獣医師を志す学生諸君はぜひご参加ください。

2月8日(日)北海道大学獣医学部講堂(200席) 時間:13:30-18:35

13:30~ 開会および動臨研グループ研修システム紹介

受講無料

13:40~14:25 循環器疾患の基本的な画像診断

公益財団法人動物臨床医学研究所(倉吉動物医療センター) 所長 高島一昭
循環器疾患の診断では、身体検査に始まり触診、聴診、心電図検査、胸部レントゲン検査、心エコー検査などが行われる。これらの検査の中でも画像診断は非常に重要な診断法の1つである。そこで、このレクチャーでは、基本的なレントゲンの取り方や読み方、心エコーの取り方と各断面における診断のポイントを解説する。また、後天性および先天性心疾患の各所見と共にこれらの画像診断を紹介したい。

14:25~15:10 犬の脊髄疾患の基礎—椎間板ヘルニアと類似疾患

舞鶴動物医療センター(京都府) 院長 真下忠久
犬の椎間板疾患の最も一般的な疾患は、椎間板ヘルニアである。しかし、日常診療において、椎間板ヘルニアと類似するが、治療法と飼い主説明の全く異なる注意せねばならない疾患に、脊髄梗塞、脊髄変性症、脊髄腫瘍、椎間板脊椎炎、脊椎不安定などがある。また、椎間板ヘルニアに続発する進行性脊髄軟化症にも十分な理解と対応が必要である。そこで本セミナーでは、これらの疾患を疑いそして診断するための基本的な神経学的検査法や鑑別診断のポイント、そして治療法について、臨床経験の浅い獣医師向けの注意点を含め概説する。

15:20~16:05 臨床現場で遭遇することの多いイヌとネコの皮膚疾患

セントラルシティ動物病院、宇野動物病院(愛媛県) 院長 宇野雄博
皮膚は外界の温度変化や乾燥から体を守り、また紫外線や細菌、有害な物質が体内に侵入するのを阻止している。さらに、皮膚には感覚器官があり、温度、痛み、ものとの接触を感じ取ることが出来る。体重10kgのイヌで皮膚の面積はおよそ0.5m²、重さは約1.2kgあり、皮膚は体の中で大きな割合をもっている。このような皮膚には体調の変化がよく反映され、外界からの刺激が原因で障害が起きるだけでなく、皮膚の異常は体調と密接に結びついている。イヌ・ネコの皮膚疾患はその病態から大きく分けると、感染症、アレルギー疾患、角化症、内分泌疾患、免疫介在性疾患、先天性疾患、腫瘍、その他、に分けられる。本日は、これらのうち臨床現場で遭遇することの多い皮膚疾患を中心に広く紹介する。

16:05~16:50 小動物外科学入門—周術期管理の基本と外科手術の適応症—

小出動物病院・井笠動物医療センター(岡山県) 院長 小出和欣
動物病院では、人の病院と異なり、多くの施設で全身麻酔下での外科手術が日常的に行われている。しかし患者の病態や手術の難易度は様々で、全身麻酔や外科手術は、常に大きなリスクを伴っている。このため手術難易度や麻酔リスクの高い患者では、経験豊富で設備の整った二次診療施設での診療を希望する家族も増えている。小動物の外科では技術の習得はもちろんであるが、患者の病態把握、適切な周術期管理、適切な術式を決定するための十分な知識を身に付けておくことも大切である。今回は周術期管理の最も基本的な部分として、術前管理と麻酔管理を含め、小動物の外科手術の適応症にはどのような疾患があるかを簡単に紹介する。

17:00~17:45 内分泌疾患を制圧してこそ臨床現場における一次診療の醍醐味を知る講義

シラナガ動物病院(山口県) 院長 白永伸行
内分泌病学は内科学の範疇にあるが、診断のための臨床病理学、内分泌ホルモンに精通するには生理学、内科治療が中心のため薬理学も必要だが外科治療も含まれるため外科や解剖学も要求され、多くのことを基礎としている。その上で臨床現場で診断できるようになっていくと自分の臨床的経験値が向上したように思えるが、治療を担うほど臨床例は教科書的な知識とのgapを感じるものである。そこには内分泌症例が現場でしか学ぶことのできない背景が無数に存在するため、本講では代表的な内分泌疾患を例に一次診療で考えていることをまとめて臨床現場論をお話したい。

17:45~18:30 貧血の鑑別テクニック

山陽動物医療センター(岡山県) 院長 下田哲也
貧血にはさまざまな原因により発生する。原因を明らかにし、原因に則した治療を実施することが臨床上重要になる。貧血は大きく再生性貧血と非再生性貧血に分類される。これは、網状赤血球数により区別し、血液塗抹標本では多染性赤血球の数でも評価可能である。再生性貧血の原因は主に出血か溶血である。溶血性貧血には免疫介在性溶血性貧血、ハイイツ小体性溶血性貧血、パベシア症(犬)、ヘモプラズマ症(猫)、細血管障害性溶血性貧血などがあり、これらはすべて赤血球の形態観察により鑑別可能。今回はCBCデータと血液塗抹の観察より再生性貧血を鑑別するテクニックを紹介する。

18:30~18:35 閉会の辞

お問い合わせ 公益財団法人動物臨床医学研究所
鳥取県倉吉市八屋214-10 TEL0858-26-0851